

TOPICS
1

トピックス…①

F₁初生牛の市場取引価格が28カ月ぶりに前年割れ

2015年4月以降、前年同月を上回って推移していた乳牛交雑種（F₁）初生牛の市場取引価格が、17年7月、28カ月ぶりに前年同月を下回った。17年4月から6月までの3カ月にわたり30万円の大台に迫る勢いであったが、それ以降、急落した結果である。

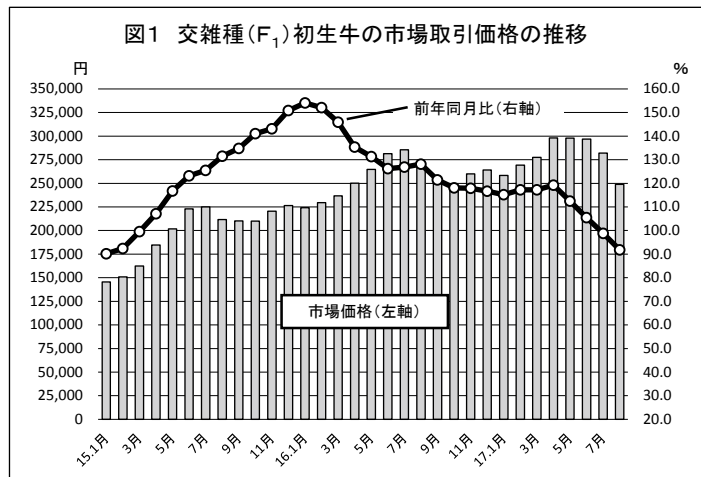
農畜産業振興機構によると、全国主要25家畜市場（一部市場を除く）における乳牛F₁初生牛の平均取引価格は、近年、季節的な変動を繰り返しながらも上昇傾向を維持してきた。F₁初生牛平均価格の月別推移は、図1に示したように、2015年5月には10万円台から20万円台へ上昇し、その後も上昇を続け、17年4月に29万8,087円、5月に29万7,879円、6月に29万6,850円と、3カ月続けて30万円の大台に急接近した。しかし、7月には28万2,085円（前年同月比98.8%）、8月に24万8,789円（同91.8%）と前年同月を28カ月ぶりに下回った。

近年みられた乳牛F₁初生牛の市場取引価格高騰の要因としては、肥育素牛としてのF₁需要が旺盛なことが指摘されている。市場関係者によると、「肥育素牛農家の購買意欲が旺盛で、市場価格が高くて、飼養頭数を維持するために落札される。一方、上場頭数は減少傾向にあるが、それが取引価格の上昇に拍車をかけたのではないか」と言われている。図2は乳牛F₁初生牛の市場取引頭数の月別推移を示しており、月により若干の違いがみられるものの、減少傾向にあると言える。

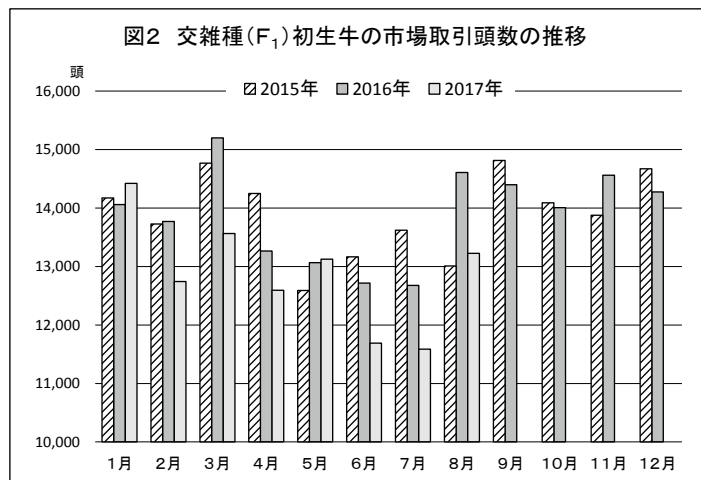
酪農経営においては、長年にわたり、副産物として市場価格が相対的に高いF₁など肥育素牛の出生比率が増加してきた。一方で、肥育素牛の増産は、乳用後継牛の不足による搾乳牛頭数の減少、生乳生産量の減少という「負のスパイラル」を引き起こすことで、酪農経営に深刻な影響を及ぼす要因の一つとなっている。

近年では、乳用後継牛として初妊牛を産地から導入しようとしても、需給ひっ迫によって取引価格が年々高騰しているため、予算内で必要な頭数の確保は困難となっている。図3に示したように、ホクレン家畜市場における乳用初妊牛の取引価格は、2015年末に急騰し、それ以降前年同月に比べて20%以上の高水準で推移してきた。17年8月には前年同月比112.8%になったものの、80万円台を維持している。

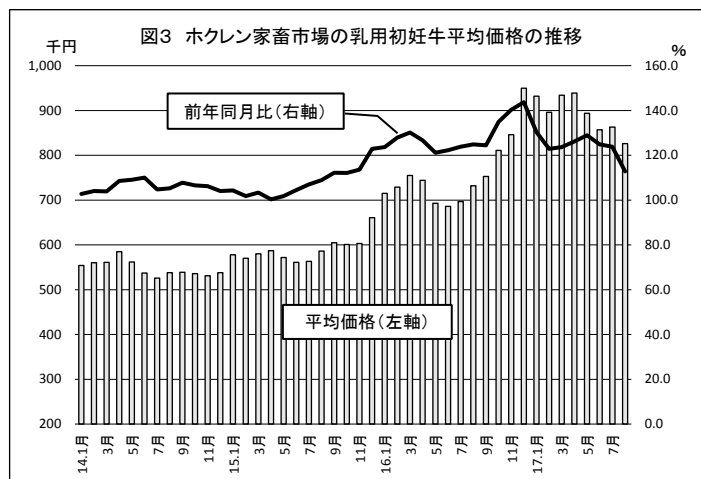
さまざまな理由が重なり、乳用後継牛が確保できず、搾乳牛の更新が遅れると、乳量や乳質が低下し、より一層収益性を悪化させてしまうことも懸念されている。そこで、このたびのF₁初生牛取引価格の低下が、酪農経営における「負のスパイラル」から「正のスパイラル」への転換の契機となるのか、今少し状況を注視する必要がある。



資料：農畜産業振興機構調べ



資料：農畜産業振興機構調べ



資料：ホクレン家畜市場情報